

More Work for the Undertaker
1949
by Margery Allingham

目次

葬儀屋の次の仕事

9

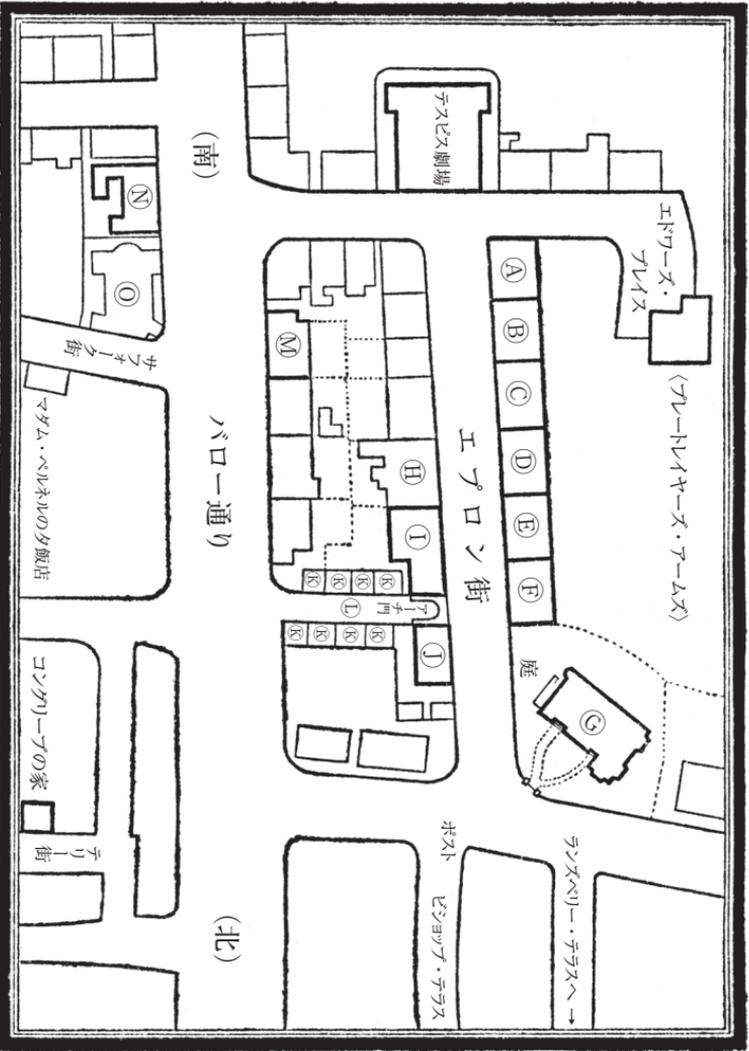
訳者あとがき 381

解説 横井 司 387

主要登場人物

- エドワード・パリノード……………故人。パリノード兄弟姉妹の長男
- ルース・パリノード……………故人。パリノード兄弟姉妹の一人
- イヴァドニ・パリノード……………《ポートミンスター荘》に下宿するパリノード兄弟姉妹の一人
- ロレンス・パリノード……………《ポートミンスター荘》に下宿するパリノード兄弟姉妹の次男
- ジェシカ・パリノード……………《ポートミンスター荘》に下宿するパリノード兄弟姉妹の末子
- クライティ・ホワイト……………イヴァドニたちの姪
- ルネ・ローパー……………《ポートミンスター荘》の女将。元舞台芸人
- クラレンス（クラリー）・グレース……………《ポートミンスター荘》の下宿人。俳優
- アラステア・シートン大尉……………《ポートミンスター荘》の下宿人
- ジャス・バウエルズ……………エプロン街の葬儀店の店主。ラグの義弟
- ローリー・バウエルズ……………ジャスの息子

ワイルド……………エブロン街の薬局の薬剤師
スミス……………エブロン街の診療所の医師
ヘンリー・ジェイムズ……………クラフ銀行エブロン街支店の支配人
ジョウゼフ・コングリブ……………クラフ銀行エブロン街支店の行員
ミス・コングリブ……………透視術師。ジョウゼフの妹
オリバー・ドラッジ……………弁護士
マイク・ダニング……………クライティの恋人
グリーナー……………ギャング
アルバート・キャンピオン……………素人探偵
マーガスフォンテイン・ラグ……………キャンピオンの従僕
チャーリー・ルーク……………バロー通り分区警察署の署長
ヨー……………ロンドン警視庁警視
スタニスロース・オーツ……………ロンドン警視庁警視正



《エプロン街周辺地図》

(地図の説明)

- A. 食料雑貨店
- B. 乳製品販売店
- C. 石炭販売所
- D. 診療所
- E. 八百屋
- F. 薬局
- G. 〈ポートミンスター荘〉
- H. フットマンズ・パブ
- I. クラフ銀行
- J. バウエルズ葬儀店
- K. 馬小屋
- L. エプロン^{ミューズ}厩小路
- M. “^{とんま}頓馬”のドラッジの法律事務所
- N. バロー通り分区警察署
- O. ローマカトリック教会

葬儀屋の次の仕事

本書の登場人物は実在の人物を忠実に描写しており、そっくりに描かれているだけでなく愛情を込めて描かれていることに、みな喜んでくれている。自分に似ているが事前に登場を知らされなかったという方がおられるなら、それはたまたま似ていただけの話だ。

さあさ みなさん おいらの話を聴いとくれ

笑いに笑って 息も詰まらんばかりだよ

だって 無残に死んだやつらの話になると

たいてい みんな 吹き出すだろが！

葬儀屋さんよ お次の仕事だ

墓石屋さんも 怠けちゃいられん

地元の墓地じゃ 葬儀屋さんも墓石屋さんも大忙し

また一つ 新しい墓ができるよ

今年の冬は 寒がってるひまもありやしな！

故T・E・ダンヴェイル（一八六七―一九二四）が、一八九〇年頃にミュージックホールで披露した歌より。

第一章 ある警察官の午後

「あそこで死んだ男がいたな。アーチの向こうの、その奥だ」スタニスロース・オーツはショーウインドーの前で立ち止まり、陳列されていたベビー服でも眺めるように奥を覗き込んだ。「あの一件は頭から離れんよ。なにしろ、私がかがんでランプ——当時は、灯油ランプを持ち歩いたもんだ——をかざした瞬間、両腕が伸びてきて、冷たくなった手で私の首を絞めたんだから。ありがたいことに、力は残っちゃいなかったがね。もう死にかけて、手をはねのけたら息絶えた。それでも、冷や汗をかかされたよ。当時は部長刑事だった。二級の」

オーツはさつさとショーウインドーを離れると、往来の人でごった返す歩道をすたすた歩き出した。ところどころが灰色に褪せた黒っぽいレインコートが背中^はで風を孕み、まるで校長先生のガウンのようだった。

ロンドン警視庁の警視正となつて一年半が過ぎたが、オーツの外見は以前とほとんど変わっていない。しょぼくれて風采が上がらず、腹はぼっこり飛び出し、黒いソフト帽の陰になった尖^{とんが}り鼻のねずみ色の顔は、相変わらず物憂げで、悩み事でもあるように見える。

「この界隈を歩くのが好きでね」気が滅入るような口調だ。「三十年近く管轄区だったが、とくに問題の多い地域だった」

「芳しい花びらのような思い出に、いまも満ちているってわけですね」かたわらの男が穏やかな口調で応えた。「で、死んだのは誰だったんです？ 店主ですか」

「いや、押し込み強盗をやらかそうとしたどこかの愚か者だ。天窓から落ちて背骨を折っておった。私が見つけるまで丸一日、その状態だったらしい。窓が割れてるのを裏手のゴルフ・マンシヨンの住人が上から見つけてね、通報してきた。思ってるより昔のことだったかもしれんな。気持ちのいい午後じゃないか、キャンピオン君。満喫しておるかな」

かたわらの男は返事をしなかった。通行人の一人が年高の警視正を見るなり、思わず自分のほうに突進してきたので、それを避けるのに気を取られていた。山高帽をかぶり、いかにも社会的地位のありそうな見知らぬ年配のその男は、正面にオーツ警視正の姿を認めるや、ぎくりとして、いきなり進行方向を変えてきたので、キャンピオンは面食らってしまった。四分の一マイルばかり歩いただけで同じことが四度も起こり、これにはいくぶん参った。それでも、かつてオーツ警視正の庭だった管轄区をご当人とそぞろ歩けば、いろいろな発見があった。

せわしない買い物客の大半は目もくれなかったとはいえ、この年老いた警察官は、いまなお一部の人間にとつては敢えてじろじろ見るのははばかられる名士だった。大きな川魚が悠悠と泳ぐように歩を進める姿を見て、世慣れた路上の小魚たちは道を空けたほうがよさそうだと散っていった。

親しい人間ですら、微笑みはしても、よく来てくれましたとばかり歯を見せて笑いかけてくることはなかった。共謀している密売人と巡回中の警官が顔を合わせたときにように、人目を忍んで作り笑いするだけだった。

当の警視正は他人など目に入らないようで、かたわらの男と、思い出と、陽の光にのみ心を奪われ、

ゆつたりと歩いていった。

アルバート・キャンピオン氏のほうは、好奇心旺盛な人には知られていないこともなかったが、活動範囲はもつと狭く、しかもかなり偏っていた。四十代で長身瘦軀、かつての金髪は色が抜けて白に近い。身なりは人目を引かない程度に整い、極端に大きな角縁眼鏡をかけた顔は、若いころに顕著だった個性のなさという一風変わった特徴を、壮年となったいまも多分に残していた。高貴な影とでも言えそうな稀有な風采を天から与えられ、初対面でも誰からも怖がられないので、ある優秀な警察官から羨まれたことさえあった。

いまキャンピオンは、自分に突進してくる男たちの大半とようやく同じ境遇になったところだった。八年近くを経て人生の主導権をふたたび手中にした彼（この前年の第二次世界大戦終結時まで、キャンピオンは特殊作戦局に所属していた）は、刑期を終えたばかりの男や学校を辞めてしまった少年のように自由というものに戸惑っていた。人生という巨大な絨毯が、半分まで織り上がったところで目の前の織機に垂れ下がっている。糸はもつれて色褪せ、どんな柄を描こうとしていたのかよく思い出せない。言いたくはないが、観賞するにはいささか気が減入る出来栄だ。

オート警視正から初めて昼食に誘われ、キャンピオンはためらいながらそれに応じた。さらには、公園でも散歩しようじゃないかというやはり空前なるお誘いも、どんなことにも深入りするまいと固く心に決め、受け入れた。いまずぐ解決しなければならぬ私生活上の問題を一つならず抱えていたし、戦前に親しんだ趣味からはずいぶん遠ざかっている気がしたからだ。

普段は速足で口数の少ないオート警視正がのんびり歩を進めていたかと思うと、胡散臭い居酒屋の前でぴたりと足を止めた。ムーア建築風の入り口を支える陶器製の柱が両隣の大型婦人服店にがち

り挟まれている店だった。

「懐かしの〈ブラック・ホース〉じゃあないか」警視正はわざとらしく驚きの声を上げた。「ようやくパブのお目見えか。この地域を担当してたころ、ここじゃ何度か仕事をしたもんだ。ポーソンとジエムズを仕留めたのもこの店だ。やつらこそ最後の大物悪党だと、われわれは睨んどった。ある晩、閉店間際にここでポーソンを見つけたとき、やつは自らローダー家の家宝の真珠を隠し持つておった。胃薬の瓶に入れてね。薬瓶は磨りガラスで、下半分は沈殿物。絶対に見つからんとタカを括つて、格子縞の着古した外套から瓶を取り出すと、私の目の前でカウンターの前に置いたんだよ。私とフランクだけでやつら二人を捕まえたんだから、まさに勲章もんだろう。フランク・ファイソンを憶えておるかね。当時、分区署長だった。私は警部で、ロンドン警視庁から援軍で来ててね。滅多にお目にかかれん立派な男だった。あいつの葬儀じゃ、子どもみたいに泣いたもんだ」

そう言いながら、オーツ警視正はドイツ軍の戦闘服のような寒色の目をちらりと上げた。その視線の先をキャンピオンが追うと、二軒先の宝石店に掛かった時計にぶつかった。三時五分。オーツは満足そうに鼻を鳴らした。

「花でも観に行こうじゃないか」そう言って、オーツは道路を渡りはじめた。じめじめした夏が過ぎ、からりと晴れわたった秋の日で、木立の下の雑草はまだ生えていたが、木の葉の色は変わりはじめていて、地面に長く伸びた物憂げな木陰は街の喧騒をあとにした身にひんやり心地よかった。二人の男はしばらく無言で歩いた。オーツは行き当たりばったりを装いながら、目的地向かっていた。

相変わらず、オーツが口を開くのは、強く印象に残る出来事を話題にするときだけだった。

「たぶん、あの木だ」ぼつりと生えたオークの木を警視正は指さした。「あそこの枝が一本切つてあ

〔著者〕

マージェリー・アリンガム

1904年、英国、ロンドン生まれ。23年に冒険小説 *Blackerchief Dickr* を発表し、作家として本格的な執筆活動をはじめ。58年、「殺人者の街角」で英国推理作家協会賞シルバー・ダガー賞を受賞。66年死去。

〔訳者〕

井伊順彦（いい・のぶひこ）

早稲田大学大学院博士前期課程（英文学専攻）修了。英文学者。主な訳書に『英国モダニズム短篇集 自分の同類を愛した男』（風濤社、編訳）、『ワシントン・スクエアの謎』（論創社）など。トマス・ハーディ協会、ジョウゼフ・コンラッド協会、バーバラ・ピム協会の各会員。

赤星美樹（あかほし・みき）

明治大学文学部文学科卒。訳書に『誰もがボオを読んでいた』（論創社）。一般教養書などの翻訳協力も行なっている。

そうぎや つぎ しごと
葬儀屋の次の仕事

——論創海外ミステリ 206

2018年3月20日 初版第1刷印刷

2018年3月30日 初版第1刷発行

著者 マージェリー・アリンガム

訳者 井伊順彦、赤星美樹

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1700-2

落丁・乱丁本はお取り替えいたします